

## 突哨山のヒグマ 傾向と対策

2021年5月24日 NPO もりねっと 山本牧

ここ数年、ヒグマが市街地に出てくるニュースが増えました。上川盆地に突きだし、農地に囲まれた緑の半島、突哨山も例外ではありません。半世紀ぶりに侵入が確認された2018年以降、毎年、公園区域での出現があります。ヒグマが人里に近づくようになった原因と突哨山での対策を説明します。

### 突哨山のヒグマ出現状況

- 2018年5月 突哨山北側の高速道路をクマが横断し公園側に入ったと通報  
園内や周辺に自動カメラ約10台を設置。小型と中型の2頭を確認。  
痕跡は山麓の水田から男山公園まであり、11月まで遊歩道閉鎖が続く。  
冬期間に関係機関と協議し、対策要綱を策定。情報の共有や確認調査、  
問題グマの判定基準、遊歩道再開の手順などを定めた。
- 2019年 雪上調査では冬眠の形跡はなかった。  
6~7月、カタクリルート上で、自動カメラが小型のヒグマを撮影。  
10月にカタクリ広場に近い刑務所駐車場に中型の足跡。  
2回の出現で、合計6日間閉鎖。
- 2020年 5月30日、扇の沢で若いヒグマを自動カメラで確認。  
びびの路でもアリの食痕があり、約2週間閉鎖。



- 2021年 4月6日、雪上調査。冬眠の形跡なし  
4月14日 自動カメラによる監視開始。  
現在6台。うち1台は無線方式。  
5月19日午後6時54分、高速道比布跨道橋に小型ヒグマ。体高約70cm。  
公園内には痕跡見つからず。



20年までのクマは、いずれも人に対しては用心深くて姿を見せず、人為的な食べものをあさってもいません。道庁による問題グマ判断基準の「段階ゼロ」(問題なし)と考えられます。痕跡やカメラ記録があったときはすぐ一時閉鎖をしますが、その後の調査で園内から立ち去ったと考えられた時点で、遊歩道は再開されています。高速道周辺に痕跡がある場合は、閉鎖は行わず、関係機関に連絡し、巡回調査を強化します。

#### 突哨山のヒグマ対策

突哨山のヒグマ対策は、出現がないときから「クマ対策」と「ヒト対策」を平行して行っています。その上で、ヒグマの痕跡や目撃情報、カメラ記録などがあった場合は、直ちに遊歩道を一時閉鎖して関係先に連絡し、確認調査などの「緊急対策」を行います。クマの動向や行動を調べ、人に対する接近や餌付けなどがなければ遊歩道再開となります。

出現時のリスク判断ではヒグマの行動、特に「クマが人を避けているか」を重要視しています。一般的にはクマが人を見て逃げないだけでは差し迫った危険はないのですが、突哨山は気軽に歩ける自然公園なので、より厳しく、「人を避けないクマがいる場合は原則閉鎖」という基準にしています。

遊歩道でゴミを見ることはほぼありませんが、人間の食べものの味を覚えさせない、という意味では、こうしたクリーンな環境が人とクマの安全にも寄与していると言えます。

クマ対策の基本はカメラ監視と巡回調査です。21年度は6台のカメラをヒグマの通り道に設置しています。今年から赤外線センサーで撮影が行われると画像を携帯電話にリアルタイムで送る無線タイプが1台本格稼働し、扇の沢に設置しました。5月19日夕方に跨道橋で小型クマが写りましたが、園内には23日現在、痕跡が見当たりません。

巡回は初冬と残雪期に冬眠の有無確認を主目的に全域調査をしているほか、随時、遊歩道周辺の痕跡をチェックしています。足跡が残りやすいよう、泥をならず、高速道路アンダーパスに石灰を撒いておく、などの手法もとっています。

突哨山は細長い丘の形なので、銃の使用は難しく、ワナ捕獲も有効ではありません。自然公園でもあり、駆除に頼らず、ヒグマが人との危険な距離で居着かないようにすることが対策の基本目標です。幸か不幸か、ヒグマが好むドングリは多くなく、これまでの採食痕は初夏のザゼンソウやアリが中心です。

ヒト対策では入山口にヒグマに関する基礎情報や対処法を解説したチラシを置いています。また、情報ボックス内に「クマ鈴」があり、自由に持ち出し、帰るときに戻してもらいます。遊歩道沿いには2カ所、カーンとよく響く「クマ鐘」が吊してあります。「鳴り物」はクマに人の存在を知らせる有効な安全策で

すが、鐘や鈴によって、来訪者に「クマがいるかも知れない」と心の準備をしてもらう効果もあります。

突哨山の遭遇対策では、積極的に攻撃してくるヒグマから身を守る、というよりも、急な出くわしを予防的に避け、万一遭遇した場合は、まず足を止め、様子を見ながらゆっくり離れる、その後は市や町に情報提供する、ということ由来訪者をお願いしています。

最近はトレイルランニング（遊歩道を走る）、自転車やバイクで走行する、という例があります。乗り物走行は禁止事項ですが、トレランには規制がありません。静かに高速で接近するトレイルランナーは、ヒグマとの遭遇の面ではリスクがあり、一本道での一般歩行者との接触の恐れもあって、今後の検討課題です。

また、ペット連れも自粛要請項目ですが、ネコやウサギを抱いたり、犬を歩かせる例を見かけます。本州では、リードなしの犬が散歩中にクマ（ツキノワグマ）に気づいて追いかけて、逆にクマに追われて買い主の元に戻ってきた、という例が2件報告されています。（いずれもクマは人に気づいて退散）



#### 参考 なぜ近年ヒグマ出没が目立つか

全道のヒグマ個体数は道総研によると、1990年の5800頭(±2300)から2012年には10600頭(±6700)と着実に増えている。それに加え、ヒグマの行動が大胆に、人を怖れなくなっていることの2つの要素が関わると考えられる。

個体数増の要因は、ベテランハンターの減少など捕獲（狩猟・駆除）圧の停滞、農作物荒らしによる繁殖増（母グマの栄養改善 産仔数増、新生児死亡率改善ほか）などがあるだろう。

生息数増加に加え、農村の過疎化を背景に、人慣れ、畑荒らし慣れした問題グマも増えている。ヒグマの行動は母グマから子に伝わるので、親子連れによる畑荒らしは翌年以降、独立した若グマによって被害が拡大する傾向がある。好奇心が強く、警戒心が薄い若グマの出現は、大きな地域問題になる。

いっぽう、人目を避け、ワナにもかからない用心深い成年グマの存在もある。毎年のように被害が続く、ワナも効果がないケースがある。

廃棄野菜など誘因の除去や電気柵設置で問題グマの発生を防ぐ対策に加え、問題グマになってしまった個体を排除する方策（調査、識別、追跡、駆除）の両方が被害防止に欠かせない。

#### 参考 追い払いや生け捕りは可能か

結論から言うと、どちらも専門チームが必要だし、社会的条件も整っていないので、極めて難しい。

突哨山のように細長い地形での追い出しは簡単に見えるが、勢子の動きと追い出し先がそろわないといけない。勢子は大騒ぎするのではなく、クマを興奮させないように静かにゆっくり、追い出し線を維持して動く必要がある。そんなチームは簡単に作れないし、クマが平地に出る、勢子側に向かうなどの危険もある。さらに突哨山北部は人家が点在し、高速道路で仕切られている。追い出し、待ち伏せ駆除とも困難と言える。

ベテランハンターの減少で、駆除はワナ捕獲（とどめは射殺）が主流になっている。ワナは警戒心の薄い新顔クマほどかかりやすく、被害をもたらす常習グマには避けられる傾向がある。駆除しても被害が減らない理由の一つである。

銃駆除は重要な手段だが、見通しのきかない夏場、人家や道路近くでの追跡や射撃は危険であり、獲物の背後に斜面（バックストップ）がない状態での発砲はできない。夜間、路上の発砲も禁止されている。

駆除用のワナは鉄骨・鉄筋を組み合わせたオリ型が普通。重く丈夫だが、ドアが閉まると多くのクマは暴れ、爪や歯がぼろぼろになってしまう。とても野外に放獣できる状態ではない。

調査用の生け捕りワナは構造が全く異なり、小型で細長い筒状。中に入ったクマはあまり動けず、外も見えないので体力の消耗が少ない。人の姿を見せずに素早く麻酔を打てるよう、ドアや作業窓が工夫されている。

放獣先も国内では同一市町村内とされている。もちろん、山林所有者や地元住民の同意も必要になる。放獣されたクマは人への警戒心を強く持つので危険が増すことはほとんどないが、一般的な受け止めは「危険動物を野に放つ」となる。

麻酔は麻酔銃の射程が数十メートルと短く、命中後も15-30分は興奮して走り回るので、市街地やその周辺ではとても危険だ。野外では実用的と言えない。

写真：一般の駆除用オリ（左）と学術捕獲用の円筒ワナ 実験で麻酔銃を撃たれた後も走り回るヒグマ

